

アブダビ発、還暦バックパッカーが行く



Al Gharbia Pipe Company Chief Executive Officer 姉崎 満

はじめに

私は2017年9月からアラブ首長国連邦のアブダビに駐在しており、もうすぐ丸6年が経とうとしています。ここまで、日本の鉄鋼メーカーと商社、アブダビ首長国政府系投資会社の3社の合併の鋼管製造販売会社を立ち上げ、初代CEOとして勤務に励んできました。初めての海外事業会社経営、初めての海外単身赴任に加えて、コロナ発生以降は原油価格暴落で石油産業向けの当社の製品需要がほぼ消滅するなど、なかなかストレスフルな日々でした。

私は旅好きで、単身であることもあって、コロナ前はストレス解消のため、週末を中心に一人であちこち海外旅行に出かけていました。2020年3月から2022年の初めのコロナ禍中では、海外旅行どころかアブダビから他の首長国に行くもの一苦勞で（UAEの中ではアブダビ首長国の規制が一番厳しく、最盛期にはドバイに行き帰りするだけで3回のPCR検査が必須でした）、ストレスが募りました。世界的にいろいろな規制が緩和されてきた昨年4月以降、私の海外旅行もようやく再開できました。結果的にこの6年間で（コロナ禍の期間を除くと実質4年間で）、海外旅行に行った回数が28回、訪れた国は下記27カ国に達しました。

- ・ 中東8カ国：サウジアラビア、カタール、オマーン、イラン、ヨルダン、レバノン、トルコ、イスラエル
- ・ アジア9カ国：タイ、ラオス、ネパール、インド、スリランカ、ウズベキスタン、キルギス、アルメニア、アゼルバイジャン
- ・ 欧州8カ国：イタリア、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、スロヴァキア、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、アルバニア
- ・ アフリカ2カ国：エジプト、モロッコ

以下ではこうした旅を通じて、私が経験してきたこと、感想などを述べたいと思います。

週末弾丸バックパッカー

アブダビに来る前から一貫して海外輸出業務に従事していたため、海外出張で訪れた国

は60カ国以上に達していました。ただし今回は仕事とは一切関係なく純粋にプライベート。業務出張とは違う観点、経験ということで、以下のような原則を立てました。

1. なるべくいろいろな国を数多く見て廻る。週末および長期休暇を最大限活用し、長期休暇以外はUAEから飛行機で3-5時間以内で行ける国が中心。
2. 旅の主な目的は、歴史や文化の道をたどり、自然を体感し、そして地元の料理と飲み物を味わうという3点。
3. 現地の人たちと積極的に交流を図る。
4. インフラ的なコストは極力下げる。飛行機はLCCを使い、国内移動は極力徒歩、電車、バスを活用。ホテルもコスパを重視して選択。
5. 事前に飛行機とホテルは押さえるが、それ以外は気ままに柔軟に現地に対応。それもあって原則一人旅。

私はこれらのスタイルを週末弾丸バックパッカーと称して、回数を重ねるごとにノウハウ、経験値を上げていきました。今では隙あらば旅立てる感じになっています（笑）。

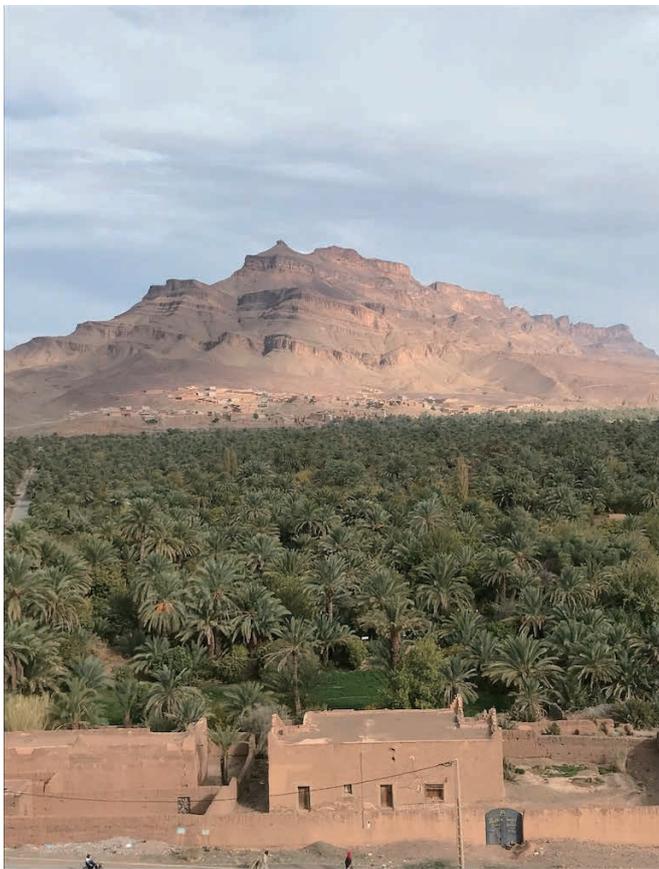
1と2の観点から、上述したように中東、アジア、欧州、アフリカに広がるいろいろな国や都市を見て廻り、複雑多様な歴史、華やかな文化、豊かな自然、ローカルの美味しい料理や飲み物を堪能することができました。そして3に関しては、旅先で出会ったいろいろな人との交流を楽しむことができました。



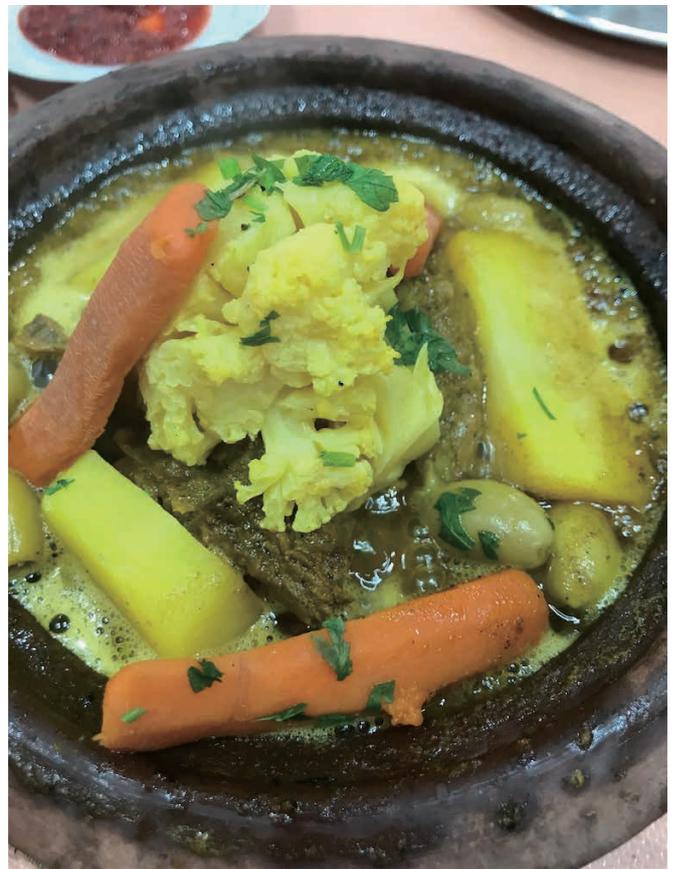
(写真①) 中東地域必須の観光地、ヨルダンのペトラ遺跡をロバに乗りながら見学



(写真②) サウジのリヤド近郊にある世界遺産，ディライーヤ



(写真③) モロッコの山と緑



(写真④) モロッコのタジン鍋



(写真⑤) イスタンブール名物, 鯖サンド

4の航空便利用の特筆すべきは、UAEの利便性です。中東全域はもちろん、アジア、欧州、アフリカにも近く、航空会社もエティハド、エミレーツといったフルキャリアの2大会社のほかに、LCCのフライドバイ、エアアラビア・シャルジャがあり、さらにコロナ後にはエアアラビア・アブダビ、ウィズエアーの2社がアブダビベースでLCCを飛ばしています。こうしてUAE全体では世界の250の都市に飛行機を飛ばしているそうです。旅人にとってこんな便利なロケーションは他にないのではないのでしょうか。

中東・アフリカ地域での体験

具体的な体験、感じたことを、中東・アフリカ地域を中心にお話ししましょう。中東で初めて行った国はイランです。さすがにイランではバックパッカー的な旅は難しく、テヘラン駐在員の友人にお世話になり、テヘラン市内だけ訪問しました。行ったのは2018年6月ですから、トランプの経済制裁の影響が浸透していてイラン経済が苦しい時代に入っていました。私が出国前に絨毯を買ったグランドバザールでは翌日に大規模なストライキが発生、イラン人の政府に対する不満が高まっていました。実は本紙前号の現地だよりでイランの魅力が執筆されていたイラン三菱商事の梨本さんに、その時にイラン事情をレクチャーしていただきました。前号で梨本さんも触れていた通り、イラン人の日本人に対するリスペクト、親しみ感はすごいものがありました。道行く人と目があって日本人というと、

皆さん顔を崩して Welcome, よく来たよく来たという感じです。一般的にイラン人はお節介なくらい親切で優しいことを実感したものです。



(写真⑥) こういう路地を歩くと、ひっきりなしに笑顔で話しかけてくる。

同じ中東、アラブ系の国でも UAE との違いも実感しました。ヨルダンの首都アンマン市内で、アバヤを着たアラブ人女性が、道路で信号待ちしている車の間で物を売ろうとして歩いていました。サウジアラビアのリヤド空港から乗ったタクシーの運転手は、明らかにサウジ人で英語が全くダメで (首都の空港のタクシーなのに)、目的地までたどり着くの苦労しました。要するにこれらの国ではアラブの現地人が普通に働き、場合によっては露天的な物売りもしている国であり、これが一般的なアラブ地域の姿なのでしょう。アブダビやドバイにいと見えない風景です。

モロッコでの旅では、2日間の砂漠ツアーをお願いしたドライバー兼ガイド氏は、本人はアラブ人で奥さんがベルベル人のごく普通の方。私がアブダビから来たというと、UAE やサウジアラビアの特権的なムスリムに対して批判的なコメントを道中1時間近くも聞かされました。普通のアラブ人が UAE のことをどう見ているか、感じさせられた一コマでした。

レバノンを訪ねたのは、経済危機が起こる前の2018年7月でした。一時は中東のパリといわれながら、長かった内戦の影響で荒廃していました。私が訪れた頃は経済も落ち着き、

観光客が増え始めていました。1日観光ツアーに参加し、古代の偉大な歴史遺跡群を見学中、案内してくれた中年男性ガイド氏は、バスの中で英仏2カ国語を駆使して説明、時折自分の人生哲学をも披露するインテリでした。彼曰く、「我々は自由と寛容を尊ぶ。いろいろな意見、考えがあり、それを言うのは構わないが決してフォースしない。それがレバノン人の矜持だ」。多様で複雑な歴史に翻弄された民族の言葉に感じ入ったものでした。

おわりに

世界のいろいろな国や都市を旅して改めて思うのは、海外の方の日本に対する温かい気持ちです。尊敬や敬意だったり、憧れだったり、好奇心だったり、どの国のどの年齢層の方でも、日本から来たと聞いて目を輝かせない人はいませんでした。そういう意味では、よく言われるように海外の旅先で我々は民間外交官であり、我々が受け取る好意を、そのまま相手にもお返しすることで、少しは世界平和に役立つのではとも思ったりします。私は今年還暦を迎えましたが、歴史、文化、そしてなによりいろいろな国、地域の人たちへの好奇心は増す一方です。引き続きアブダビから世界に歩みを進めて行きたいと願っています。

追記。私の全旅行の記録が、下記のブログにあります。検索で旅行記と入れていただくと全旅行、さらに行先の国を入れていただくと、その国の記録が参照いただけます。ご関心があればご笑覧下さい。

『anezakimanのアブダビ日記』

<https://anezakimanad.hatenadiary.com/>

写真はすべて筆者提供